

### ③ クヌッセン機関長

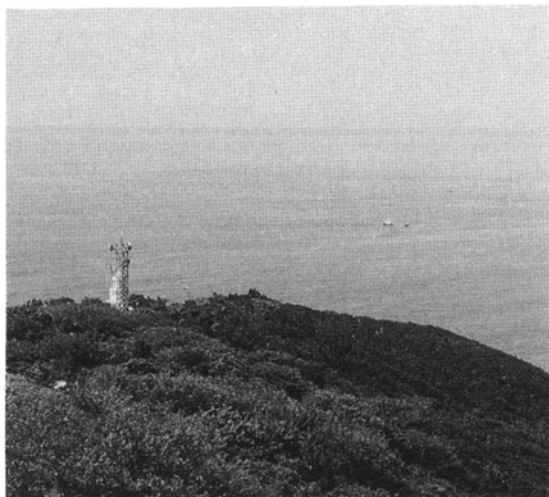
昭和三十二年二月十日夜 冬のあらしが荒れ狂う日の岬灯台沖の海上を徳島県の機帆船「高砂丸」が火災を起こし波にもまれていた。乗組員はたった三名、激しい北風のさなか、しかも、真暗い海上での船火事である。火は大きくなるばかりでどうしようもない。そのうちに火は油に燃え移り、大きな音とともにガソリンが爆発した。もうだめだ。全身やけどをうけた船員の一人は力つきて、さかまく波にのまれてしまう。残った二人は、燃えさかる火に追われながら、助けをもとめる信号旗をマス

トにかかげ運を天にまかせた。

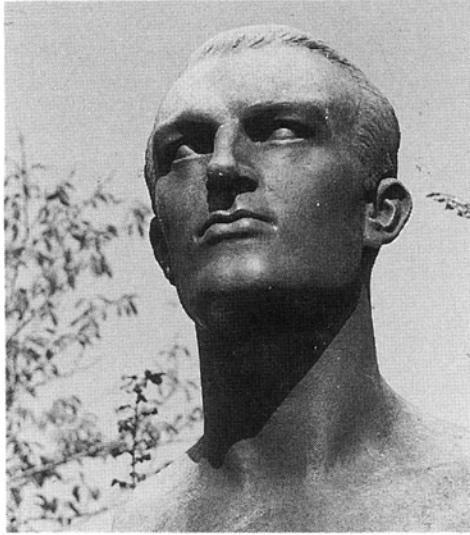
火は燃えさかり波はますます荒れくるうばかり……

とその時「ポーポーポー」と汽笛が海上に響きわたってきた。救いの船が現れたのだ。その船こそ、デンマークの貨物船エレン・マースク号。天の助けと、喜びにうちふるえ、けんめいに手をふる二人の船員。だが、その喜びもつかの間、一人の船員が強風のため急に傾いた甲板かんばんから海中へほうり出され波にのまれてしまった。

「速度を落とせ、ライフボート用意」六十才のモーラ船長はど



日の岬パークから臨むのぞ



クヌッセン機関長の胸像(日の岬パーク)

なった。

マースク号の全船員は、二月の寒い風をものともせず、ただ一人生き残っている船員を助けるために、必死の作業を続ける。荒れ狂う波の上によくやくボートが下ろされた。

「大丈夫か。」と機関長ヨハネス・クヌッセンは、目を光らせながら言った。デンマークの海の男たちのたくましい手に、オールがにぎりしめられた。波しぶきをあびながら、ボートはこぎ出される。

ボートは山のようにうねり上がる波に、いくたびか、すがたをかくしながら、ぐいぐいと機帆船「高砂丸」に向かって進む。まっ黒な夜空にのび上がったものすごい火柱、飛び散る火の粉、もうもうとたちこめる煙、危険をおかしてようやく「高砂丸」に近づいた。ボートから救命具が投げられる。ボートは高砂丸に近づいては離れ、離れては近づき、やがて日本人船員を無事ボートに救った。

マースク号の甲板では、どっと喜びの声があがった。まもなく助けられた日本人は、ボートから本船のはしごに取りつき、一步一步それを上がり始めた。もう大丈夫だ。みんなは、甲板から下のボートをのぞきこむように口ぐちにいった。

「よくやってくれた。ご苦労、ご苦労。みんな早く上がってこいよ。」

だが、その時、せっかく救われた日本人は、手をすべらせたのであるうか、あつという間にはしごの中途から海中へ落ちてしまった。

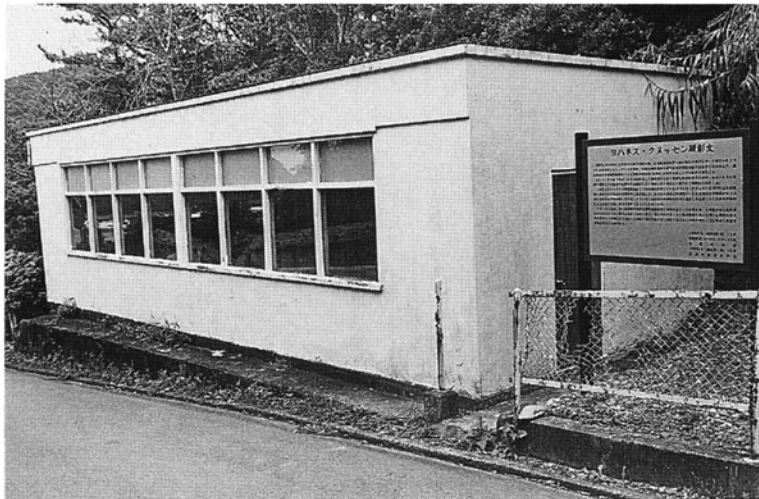
思いがけない出来事であったので、みんなはぼう然としていた。

その時、一番前にいた機関長クヌッセンは、上着を脱いで「おれが助けに行ってくる。」と言って身をおどらせ、氷のような海中に飛び込んだ。止める間もなかった。いや、止めても、思いとどまる機関長ではなかった。人の苦しみを見ては、じっとしておれないのだ。

クヌッセンは一度は日本人をぐっと小わきにかかえ救い上げたが、次の瞬間どっと襲いかかる大波にうたれ二人ともその姿は見えなくなった。

夜通し、ボートで二人の姿を探し続けたが見つめることが出来ないまま夜が明けた。その朝、クヌッセン機関長は日高町田杭の磯で、その三週間後に日本人船員は阿尾浜沖合三キロメートルの海底で発見され、それぞれ手厚く葬られた。

国境を越えた海の男の友情をたたえる胸像と記



クヌッセン機関長ゆかりのボート保管庫(日高町田杭)  
(波で岩に打ちつけられたあとがなまなましい救命ボートが保存されています。)

念碑が現場を見おろす日ノ岬パークにたてられて、航海の安全を見守るように海を見つめています。

この胸像きょうざうと記念碑は、ヨハネス・クヌッセン遺徳いとくけんしやう顕彰会けんしょうかいと関西デンマーク協会の手でたてられました。クヌッセンの胸像はデンマークの彫塑家ちやうそかグームセン・ホルム・クリーン氏の作品で一九六二年六月五日、デンマーク駐日大使によりここで除幕じよまくされました。

毎年二月十日、大勢の人々が集まり、クヌッセン遺徳顕彰会などが中心となりここで記念祭が行われています。

クヌッセンゆかりのボートは、国境を越えたクヌッセンの人類愛に燃えた勇敢な行いを広く知ってもらうために、保存し、後世にながく伝えるために残されています。この保管庫は、クヌッセン遺徳顕彰会や日高町の手でたてられました。遺体と救命ボートの漂着した日高町田杭地区では、あまりにも勇敢なクヌッセン機関長の行為に感動を受け、せめて彼の魂を弔いたいと、その地に供養塔を建て、住民が交互に清掃し、常に新鮮な花を供えて絶やすことなく慰霊の気持ち捧げ続けています。

故国を遠く離れた他国の海で一日本人を救おうとして命をささげたクヌッセン機関長の美しい行い、愛には国境のないことを、何よりもはっきりと教えてくれました。